

討を要する。浅背筋と浅胸筋は系統発生的に二次的に局所へ移動した筋群として記載されているが、これらの各筋と腹鋸筋および腸腰筋の神経支配区分についてはさらに検討し、前肢帯筋と後肢帯筋の対応関係について研究を進めたい。

資料：4

霊長類腕神経叢の層構造解析

木田雅彦（札幌医大・第2解剖）

肩甲上神経の皮枝である *N. supra-axillaris* (Bolk, 1902 腋窩上神経) は、原猿類では肩峰下で、新世界猿では三角筋胸筋溝を通過して皮下に現れる。しかし類人猿およびヒトでは、この皮神経は通常存在せず、ときに変異として観察される。原猿類でのこの皮神経の分布域は上肢外側であり、屈側と伸側の境界領域にある。そのためこの皮神経の背腹の所属は従来決め難かったが、腕神経叢における層構造の検討により、明らかにこの神経が腹側であることがわかった。新世界猿では、この分布域が明らかに屈側領域に及んでいる。また一部は、前胸部にも分布する。ヒトの前胸部において相当する部位は、中間鎖骨上神経が分布する。以上のことから申請者は、霊長類の系統発生の過程において、肩甲上神経の皮枝（またはその一部）の経路は、鎖骨上神経の経路へと変化するという作業仮説をたてた。

今年度の研究で *Nycticebus coucang* の1側において、腋窩上神経に通常肩甲上神経由来の皮枝に加えて、C5に由来して鎖骨上神経と同様の経路を独立して走行する神経の変異が観察された。この変異は、皮枝成分が肩甲上神経から鎖骨上神経へとその経路を変化させる過程での移行的な形態と考えられる。

資料：5

霊長類におけるポリエン酸代謝

藤本健四郎・金沢文子（東北大・農）

ドコサヘキサエン酸 (DHA) は、生体膜の構成成分のひとつとして重要であり、脳や網膜では特にその濃度が高い。ニホンザルおよびカニクイザルの大脳皮質を分析した結果、幼若動物では DHA 濃度が低く、胎生140-160日の動物ではアダルトの場合の約60%程度に過ぎなかった。生後1

年ではアダルトの88%にまで増加したが、大脳皮質での DHA 合成能が低いことを既に明らかにしており、その供給のかなりの部分を肝臓と外部からの栄養に依存しているのではないかと思われた。そこで、胎盤および年齢の異なる動物の肝臓での脂質組成の変化について検討を行い、その結果について報告する。

肝臓より調製したマイクロソームによる *in vitro* 試験の結果、胎生120日、新生仔、アダルトのいずれにおいても同程度の DHA 合成能を認めた。肝臓リン脂質中の DHA 濃度はいずれの年齢でも約10%であったが、*n-6*系ポリエン酸濃度は大脳皮質の場合と同様の変化を示し、幼若動物では *n-6*系ポリエン酸、特にアラキドン酸濃度がアダルトに対して有意に高かった。また、大脳皮質では認められないリノール酸（アラキドン酸の前駆脂肪酸）が肝臓では高濃度に認められたが、アラキドン酸の場合とは逆に、アダルトに対し幼若動物での濃度が有意に低かった。脂質組成を比較した場合、幼若動物の肝臓ではリン脂質濃度が低く、コレステロール濃度が高かった。リン脂質について見た場合、ホスファチジルコリン/ホルファチジルエタノールアミン比が幼若動物では低く、大脳皮質の場合と逆の傾向を示した。また、合成・貯蔵器官である肝臓の場合とは異なり、胎盤脂質ではリン脂質濃度が非常に高く、その脂肪酸組成は新生仔肝臓リン脂質のそれと近似していた。新生仔の場合、自身の肝臓合成系よりも母体から供給されたものを反映していると思われた。

以上、主に大脳皮質および肝臓のポリエン酸濃度の変化について要約したが、肝臓から大脳へのポリエン酸の移行形態、リポ蛋白、脂肪酸結合蛋白との関係について、今後、検討を加えたい。

資料：6

霊長類動脈系の系統発生的研究

池田 章・藤本勝邦・吉井 致・松本 真・西谷耕二・太田茂男（川崎医大）

ヒトの動脈系はからだのいろいろな形態特徴のうちでも最もおおきな個体変異をしめす。このような変異の意義を明らかにするために、われわれは系統発生的観点から立体造影法と肉眼解剖学的剖出によって霊長類各分類群の動脈系の解析をおこなっている。